

平成30年9月18日(火)

老球の細道437号

「甲子園という病」の中の「ハスの花」

会津バスケットボール協会 室井 富仁

8月夏の甲子園は100回の歴史記念大会として始まり、金足農業高校のミラクルで大いに盛り上がり終了した。巷では、中、高校の部活動は「ブラック部活」などと批判されるが、こと甲子園に関しては朝日新聞を中心とする「甲子園メディア」が美談を作り、猛暑の炎天下での開催、大会が期間が3週間近くかかる日程（高校の部活動の大会でこのような長期開催が許されているのは夏の甲子園だけ）などに対する批判はほとんど出ない。

そんな夏の甲子園が100回を迎えて、ますますエスカレートするのではないかと心配していた折、新潮社から『甲子園という病』（氏原英明著）という本が出版された。この本では美談とドラマに事欠かない甲子園野球の背後の「不都合な真実」に光を当てている。

そんな批判を「そうだ、そうだ」と読んでいくうちに「ハスの花」に出会った。それは野球の超名門校から輩出された二人の文武両道選手のエピソードである。二人の選手と言うのは、一人は2017年のドラフトでロッテから1位指名を受けた安田尚憲選手（履正社）。もう一人は今年の夏の甲子園優勝投手に輝いた根尾昂選手（大阪桐蔭）である。

安田選手は小学から歴史書を読み漁っていた。その際に身につけたのは考える力だった。「勉強をやっていることが野球につながられるようになったのは高校生になってからですが、今になって思うのは、考える力がないと成長の度合いは違うということです。指導者から言われたことをどう受け止めるかが成長のスピードに関わってくると思います」

スポーツは記憶力と二つのそうぞう（想像、創造）力が必要と言われている。良かったプレイ、そうでなかったプレイを記憶しておき、自分の中で、次はどうしていくかと想像して、創造していく。そのためには、「考える力」を習慣づけていくことが肝要になる。

大阪桐蔭の根尾は高校入学まで岐阜県の中学ですべての教科で「オール5」を取る秀才でありながら、幼少期からスポーツのシーズン制を導入して、冬場はアルペンスキーをしていた。春から秋までは野球に取り組み、中学の日本代表として世界大会に出場。冬はスキーで、全国中学アルペンスキーで優勝し、こちらも世界大会に出場しているスーパー中学生だった。今でも、私学強豪校の厳しい練習環境に身を置きながらも、就寝前の30分やバスでの移動時間などに勉強や読書は欠かさないという。

大阪桐蔭の西谷監督は根尾を次のように評す。

「色々なことに関して、完璧にやりたい。そういう選手なんです。野球をやっているから勉強がおろそかになるのは嫌だし、勉強だけをやって野球は普通のレベルでいいと考えるのも嫌なんです。そういうタイプの選手は今までいなかったです」

この二人の育成から見えてくるのは、小さい頃から一つの競技に特化することなく、色々な競技に取り組む余裕を持つことが競技の能力や運動神経を高めることにつながる。練習時間が長くて勉強する時間がないとか、疲れて勉強できないとか、部活だけががんばって勉強などできなくともいいと逃げ道を作ることは「考える力」をつけることを放棄する。その結果、大した選手にも成長しないということである。

私学の強豪校から文武両道を実践して成功を収めた選手が育った原因はバランスの良い人間づくりにある。すぐに成功を求めないところに最後は成功が訪れる。